

学位論文抄録

希死念慮および自己破壊行動の心理社会的関連要因に関する実証研究
(Empirical study on psychosocial correlates of suicidal ideation and self-destructive behaviors)

平村英寿

熊本大学大学院医学研究科博士課程脳・免疫統合科学系専攻脳病態学

指導:北村 俊則 教授

学位論文抄録

[目的] 自殺既遂者の約半数は過去の自殺企図歴を有し、自殺の直前に希死念慮を周囲に打ち明けるとされている。したがって、自殺という多次元的な事象を理解するためには自殺既遂だけでなく、既遂に至る準備状態である希死念慮や自己破壊行動などの自殺関連行動がどのような構造を有しているかの理解が不可欠である。一般人口サンプルと臨床サンプルをもちいて希死念慮や自己破壊行動に影響をおよぼす心理社会的、精神医学的要因について解析する。

[方法] 大学生サンプルを対象にした調査では、希死念慮の比較的短期間の変化を反映する状態的 (state) 側面と希死念慮の比較的長期に持続する特性的 (trait) 側面に分けて解析を行った。状態的側面に関しては経時的データを用いて、ストレスフルライフイベント、自動思考、抑うつ気分と近い将来の希死念慮の関係について共分散構造分析を行った。特性的側面については横断面のデータを用いて、抑うつ気分、被養育態度、被虐待体験、パーソナリティ傾向と特性的希死念慮の関係について多変量解析を行った。大規模地域住民サンプルを用いた調査では、ストレスフルライフイベント、非適応的コーピングスタイル、QOL や心理学的ウェルビーイングを含む心理学的リソース、ソーシャルサポート、地域活動への参加が希死念慮に及ぼす影響について共分散構造モデルを用いて解析した。精神科入院患者サンプルをもちいた調査では、退院後 6 カ月以内の自己破壊行動を従属変数として年齢、性別、入院中に評価した希死念慮、抑うつ、不安、怒りの感情、全般的機能、被虐待体験、絶望感、パーソナリティを独立変数として判別分析を行った。

[結果] 希死念慮は比較的長期に持続する特性的側面と比較的短期間に変化する状態的側面があり、状態的希死念慮は抑うつ気分と自動思考によって規定されており、先行研究で言われていたようなストレスフルライフイベントによる直接の影響は認められなかった。特性的希死念慮は抑うつ気分とは独立してパーソナリティの影響を受けることがわかり、パーソナリティは被虐待体験に強く影響されていることが示された。一般地域住民の希死念慮は大学生サンプルでも示されたと同様に、ライフイベントの直接の影響はなく、心理学的リソースを介して希死念慮に影響することが示された。加えて、地域活動への参加やソーシャルサポートは心理学的リソースに良い影響を与えることで希死念慮を減じていることが示された。精神科入院患者サンプルにおいては、女性であること、若年であること、新規追求性が高いことが退院後 6 カ月の自己破壊行動を有意に予測することが示された。さらに、患者の報告する将来の企図の可能性は有意な予測因子ではなく、過去 1 年間の希死念慮が強いほど将来の自己破壊行動のリスクが高いことが示された。

[結論] 青年期の希死念慮の悪化や維持においては抑うつ気分に加え、自動思考、パーソナリティを介した被虐待体験の存在に注目することが重要である。しかし、個々人への介入のみでは効果や実行性の面でも限界がある。地域住民の希死念慮は地域活動への参加やソーシャルサポートを促進することによって予防できる余地があることが示唆された。入院患者の自己破壊行動予測においては、患者自身の報告する可能性予測よりも患者の過去の希死念慮の頻度が強い予測因子であることが示された。自殺は多次元的な病といえる。したがって、たった一つの観察が自殺関連行動の予測や評価の絶対的な答えにはならない。今後わが国においても自殺関連行動を多次元的かつ縦断的に評価するに足る多くの実証的研究の成果が待たれる。